

クリケ... クラケ....

チジャンを知らない人のために少しだけ説明しておこう。このチジャンにはまったく運というものがなく、生まれながらに蕁麻疹持ちだった。足の指先から腕まで、かゆくて、かゆくて、かゆくて。それだけだった。気晴らしと言え、いたずら。そして、それよりましなひまつぶしと言え、からかい。彼のココナツ並みの頭の中には、からかいの他は何もない。もうひとつ、小石は別として。チジャンは一日中石の上に座って、何をするでもなく、辺りを見回し、石から降りて、降りて、上る。

朝早く、チジャンはすることに決めた。漁を。あちこち漁をするのではなく、どこでもいいというわけではない。二、三日前から彼は美しい池に目星をつけていた。きれいなきれいな池、水は青々としているし、どの魚もだいたい... 20メートルはあった。気にしないこと、お話なんだから。小さな魚が 20メートル。チジャンはこの大きな池に目をつけていた。彼は言った：「... 僕の漁場だ」。

彼は囲いを飛び越え、中に入った。そこに着く前から、大きな池の真ん中でいい花の香りが彼の鼻をとらえ、彼の鼻をくすぐる。チジャンは右を見て、左を見た。するとそこにあったのは... 花々。ありとあらゆる色、ありとあらゆる香りが彼の感覚に押し寄せる。チジャンはそこで花のいい香りをむさぼる。そして、そろりそろり、ゆっくりと彼は池まで進んだ。小さな帽子を置き、麻袋で作ったぼろサンダルを脱ぎ、チジャンはきれいな石を選んでその上に腰掛けた。

小さな釣り竿をつかみ、水の中に糸を投げこんだ...。魚は一匹も出て来ない。チジャンは言った：「そんなはずない... 何も釣れずに家に帰るわけにはいかない」。魚には命令できない。チジャンが命令するのは糸の方である。帰る前に一匹は見つけないと。

小さな釣り竿をつかみ、水の中に糸を投げこんだが、相変わらず魚はまったく姿を見せない。あー！ チジャンはいらいらしてきた。家に帰ろう、明日の朝また来よう。暗くなってきたので彼は帰り始めた。家に帰らなくてはならなかった。

しかしその晩、チジャンは寝床の中で、もぞもぞ動き、あっちへごろり、こっちへごろり、眠れなかった。気になって仕方がなかった。あんなに大きな池なのに一匹も魚がないなんて！ そんなことはあり得ない！ でも、ひとまず明日まで待つことにしよう。

真夜中になり、チジャンは釣り竿をつかみ、ランプを提げ、かごを持った。そして、大きな池にまっすぐ向かった。ところが、彼が囲いを飛び越え、柵を通った時、何か変だった。何か足りなかった、今朝と違って。そこでチジャンは、鼻をひくひくとうごめかした。彼の鼻をくすぐった、花のいい香りがしなかった。あの花はどうなったんだ？ どこにも花は見あたらない。代わりにチジャンはランプを掲げて、彼の回りに何があるのかを見ようとした。

彼は、何かの木が夜の間に生えていたのを見つけた。その木には大きな大きな葉が上に茂っていた。大きな葉があちらでもこちらでも、至るところで生えていた。そこでチジャンはそれを眺めた、じっと眺めた。すると、彼が眺めていると、大きな葉がますます生えてきた。チジャンは目を閉じて言った：「そんなはずはない。僕は夢を見ているのだ」。彼は目を開けた。彼が葉の茂みを見ていると、どんどん生えてきた。「葉は何て早く生えているんだ！ くそっ」。葉はとうとう池の上にまで張り出してきて、魚の大群をぶらさげていた。

あああああー！ チジャンは言った：「うそだろ、そんなはずはない。朝早くから僕は魚を釣ろうとしたのに、木が... 魚を... ? ああああ、ちょっと待てよ」。チジャンはポケットの中からナイフを取り出した。シャキッ、シャキッ、シャキッ、彼は葉の茂みを切る。ところが何てことだ、全然だめ。切れば切るほどさらに生えてくるのだった。

一枚切れば二枚生え、二枚切れば三枚生えてくる。

四枚切れば、ははー！ 誰か計算出来るかな。四枚切ったら何枚生えてくるかは誰かに任せるよ。

そこで、ちょっと間を置いてチジャンは言った：「切るのをやめないと。切れば切るほど生えてくる」。この木は一体何なのだ。こんなばかなこと、悪魔の仕業か... カル婆さんの仕業なのか？ チジャンは言った：「よし、切ってもだめなら燃やしてみな、だ」。彼はランプを手に取り、葉むらの中に火を点けた。おー、おー、チジャンはやめた。燃えれば燃えるほど葉っぱが生えてくるのだった。そこで、葉っぱはさらに倍々に生えてきた。

二枚燃えれば四枚生えてくるという始末。

お話するまでもないが...

チジャンは言った：「ようし、落ち着け、落ち着け、落ち着け。この葉っぱどもがどうやって生えてくるのか見ようじゃないか」。そこでチジャンは腰をおろした、石を見つけて。彼は座って観察した、よく眺めた。葉っぱがどうやって生えてくるのか... 両の目でしっかり見た。

彼は球のようなものを見つけた。そのオレンジ色の球が葉っぱの上で生え始めた。あー！ チジャンは思った：《よしよし、きれいな花が戻ってきた。きれいな葉っぱも生えてきた》... だがそれは全部毒草だった。彼が少しずつ近づくと、その球はだんだん大きくなった。チジャンは鼻をふくらませ、ふくらませ、その花の香りがどんな香りか確かめようとした。これって今朝嗅いだ香りだろうか？（くんくん）

その球からは何の香りもしてこなかった。チジャンは言った：「あれ、香りのない花ってどういう花なんだ？」。そこで彼は、ちょっと、こすってみた。こすったら必ず香りがでるはずだ。

チジャンは球をこすって、こすって...。すると、彼がこするたびに、可愛らしい小さな声が球の中からした。その声は彼にこう言った：「チジャン、チジャン、私をなでて、もう少し」。チジャンがこの可愛らしい小さな声を聞いた時、他の人ならこの声を聞いて... 中に可愛いお姫様がいると思うだろう。もし、

なでたら、彼女は僕と結婚したいと思うに違いない。そこでチジャンはまた、球をこすり始めた。彼がこするたびに、蜜のように甘い小さな声が答えた：「チジャン、もう少し私をなでて」。彼は球をこすり、なでた。

彼がなでるたびに、その球は大きくなった。ところが、問題は、球が大きくなるだけということ、何てこった。

クリケ

クラケ

クラケ、獲物だ... 石が浮いている。球は大きくなるだけ。可愛い声、蜜のように甘い声、これも大きくなる。

「チジャン、私をもっとなでて...」。

(大きな声で)「チジャン、私をもっとなでて...」

あー！、なんてこった、あー！

チジャンは驚いて... 走り出した。

「... 可愛い小さな声がして... それが大きくなって... 畜生、なでるたびに怖くなってくる」。チジャンは前方に向かって走り出した。彼が走れば走るほど、球はますます大きくなった。彼は走って走って走って、あっちに転がり、こっちに転がり、球は彼のすぐ後ろ。きれいな球は、大きな、大きな、大きなカボチャになった... それでも彼のあとを走ってくる。「チジャー、わたしを一、もつと一、なでてえ...」。

チジャンは言った：「放っておいてくれ！ 助けて！ 怖いよー」。幸いにも、チジャンは道で亀じいさんとすれ違った...

「亀じいさん... あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ... 亀のじいさん、助けて！ 僕を助けて下さい！ カボチャが僕を食べようとしてるんです！」。

亀はチジャンを眺めて言った：「いやさー、チジャー、あんたのようなあ、ちゃんとおしたあ男があ、小さなあカボチャがあ、どうにかあしたってえー？」。チジャンは亀に言った；「ちがう、ちがう、ちがう、ちがう、小さなカボチャじ

やなくて、きれいなカボチャ！ ほら見てよ、やってくる、あっちに転がり、こっちに転がり、カボチャだよ、あっちに転がり、こっちに転がり、カボチャ！」。そこで亀はそのきれいなきれいなカボチャを見て言った：「それでえ、あんたがあ、ここにい、おるのかあ... 隠れるならあ、他を一当たってえくれえ。わしはあこわいからあ、なあ、わしはあこわいい」。

亀はチジャンのお尻に足蹴りを食らわせた。チジャンはあっちに転がり、こっちに転がり、ようやく地面にはいつくばった。しかし相変わらず聞こえてくる、カボチャがやってきて「チジャン、私をなでて、もっと... !! チジャン!!!!」。

チジャンは走った。「助けて！ 助けて！ 怖いよー！ 怖いよー！、助けてー！」。幸いにも、チジャンは道で山羊じいさんとすれ違った。山羊じいさんは草を食べているところだった。こんな感じで草をたべていた...。あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ...

「山羊さん、山羊さん、お願いだ、助けてくれ！ 怖いよー。カボチャが僕を食べようとしているんだ！」。

「べえええええええ、あんたのようなちゃんとした男が小さなカボチャが怖いって」。チジャンは山羊に言った；「ちがう、ちがう、小さなカボチャじゃなくて、きれいなきれいなカボチャ！ ほら見て、やってくるよ、やってきた」。カボチャの声を聞いた。それはあっちに転がり、こっちに転がり、あっちに転がり、こっちに転がり...

「チジャン、私をもっとなでて... お前に言っているんだ!!!!」。

チジャンは怖くなった。「僕をかくまって下さい、やって来る！」。山羊はチジャンに言った：「いーんやあ、わしは怖い。こんなでかいカボチャ、こりゃ悪魔のカボチャだ！ 隠れるなら他の場所を当たってくれ」。

山羊はチジャンのお尻に足蹴りを食らわせた。チジャンはあっちに転がり、こっちに転がり、ようやく地面にはいつくばった。それから彼は走り出した。彼は走って走って、走り疲れたが、それでも走った。彼が走るとカボチャもあ

とについてきて、ほとんど追いつくばかりだった！

カボチャがチジャンにかみつこうと止まったその時、チジャンはモカ牛じいさんとすれ違った。牛じいさんは草を食べているところだった。あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ、あー、むむ...

「豚でも山羊でも牛でもいいから、お願いだ、僕をかくまってくれ！ カボチャが僕を食べようとしている、かくまってくれ！」。牛は彼を見て言った：「ムー、あんなのようなちゃんとした男が小さなカボチャを怖がるって？ ムー」。 「ちがう、ちがう、牛さん、小さなカボチャじゃなくて、見てよ、やってくるよ、きれいなきれいなカボチャ！」。そこで牛はそのきれいなきれいなカボチャを見た、そいつはやって来た、あっちに転がり、こっちに転がり。モカ牛は、自分もきれいなきれいな牛なんだけど、そのカボチャが怖かった。牛は言った：「いんや、隠れるなら他の場所にしてくれ、わしは怖い」。

牛はチジャンの尻に足蹴りを食らわせた。これで三度目、チジャンはあっちに転がり、こっちに転がった。チジャンは言った：「カボチャが僕を食べようとしている、怖いよー、僕を守ってくれ、かくまってくれ、お願いだ！ 守ってくれ！」。

私はチジャンに言った：「ところでチジャン、お前はココナツ頭の中でいたずらをたくらんでいたじゃなかったのかい。何かまたやらかしたのかい？ まずいことでも？」。チジャンは私に言った：「いや、僕はただ魚を釣りに来ただけなのに、あのカボチャが... 僕を... 守ってくれ！」。そこで私は彼にこう言った：「よく聞いて、動かずに、動いちゃだめ、戻ってくるから」。私は家に行って棒きれを拾い上げた。その棒をつかんで地面を三回叩いた。

一回、二回、三回。

私が棒で地面を三回叩くと、大地が揺れた。カボチャはあっちに転がり、こっちに転がり、海の真ん中に落ちた。

私は同じ棒で今度は海を三回叩いた。

一回、二回、三回。

私が棒で海を三回叩くと、海が揺れ、海水が盛り上がってきた。鮫が海で飛び跳ねた。そしてカボチャの上に飛びかかり、ひと口ずつ、ちよつとずつ食べ始めた。チジャンは私の横で地べたに隠れていた。

あー、彼は笑った、彼は喜んだ。

「食べてしまえ！ 食べてしまえ！」。

私はチジャンに言った：「その口を閉じなさい、口を閉じて！ くれぐれも面倒を起こさないように！」。

カボチャはもういない。鮫がカボチャをちよつとずつ食べてしまった。

.....

くれぐれも、いたずらはやめるように、面倒を起こさないように。

チジャンは答えた：「もうしないよ」。

.....

ところが何と、チジャンのココナツ頭にはいたずらしかない。彼は何もしないでいることが出来ない。チジャンは歩きだして池に戻った。彼が池に着くと、そこは魚であふれていた。チジャンは一番大きな魚をつかまえた。どれぐらい大きいかって言うと... 20メートルの魚！ チジャンはその魚を家に持ち帰り、洗って調理して食べた。彼が気づいたのは、その魚がどうも奇妙な色をしていたことだった。彼は食べ終わってからちよつと考えた。「それにしても、この魚は変だな、オレンジ色、オレンジ色、オレンジ色、オレンジ色。こんな魚を見たのは初めてだ」。

彼は魚をつかまえ、食べて、骨を捨てた。彼は寝ようとしたが、頭の中がざわついていて。もう考えるのはやめよう、カボチャは死んだのだから、でもあの木はまだあるぞ。チジャンは戻った。

真夜中に、彼は釣りをしたあの場所に戻った。そこにはあの木がまだあった。チジャンは言った：「それにしてもどうということだろう？ カボチャは死んだ、あの悪魔は死んだ、でもこの大きな木はなぜまだ生えているんだ？」。それからチジャンは家に戻った。彼は行ったり来たりして、始末する方法を考えた...

あの木を...でも見つからなかった。彼は魚の骨の上を歩いた。魚の骨を砕き、粉々にして、それは形がなくなった。チジャンは言った：「ちょっとあることをやってみようか」。彼は魚の骨を集めて、砕き、粉々にして、木の上からまんべんなく振りかけた。すると、みんな私を信じて、クリケ・クラケ、骨が葉っぱに触れたとたん、木が枯れてしまった。木全体が死んでしまった。

これはお話、物語で私が言っているんじゃない...。このお話、物語のカボチャは、みんなが食べているカボチャ、レユニオンのカボチャと同じもの。ある日あなたが市場や店でカボチャを買ったら、ちょっとなでてみてはいかが。もしカボチャを見つけたら...。食べてはだめ！ というより、絶対に買ってはだめ！ でも、なでてでもこすつても、うんともすんとも言わなければ、それは食べてもいいカボチャ。

クリケ・クラケ

これは長い話だけれど、これでも少し短くしてある。そうしないと飽きるの。なかなかいい話で私は大好きだ。チジャンが他の人物に代わることもある。